平成30年度(2018年度)スジエビ接岸状況蝟集モニタリング

亀甲武志・孝橋賢一

1．目　的

琵琶湖産スジエビの資源状況をモニタリングするため、例年、春から初夏にかけて蝟集の見られる水産試験場の港湾において、簡易なトラップによる親エビの接岸状況のモニタリング調査を実施した。

今後のこれらのデータの蓄積を待ち、資源変動予測のための基礎データとする。

2．方　法

4月上旬から9月下旬にかけて、水産試験場の船溜まりに蝟集基体としてキンランを入れた箱形トラップを3基設置し、7～10日ごとに取り上げ、エビ類の種類別に個体数をモニタリングした。採集したスジエビは、2-プロパノール（50%）で保存し、腹節側甲の腹肢の形状から雌雄を判別、抱卵の有無を判別するとともに、デジタル画像化して、画像処理ソフト(Image-J)により画像上で頭胸甲長(CL)を測定した。

3．結　果

スジエビの採捕数は、とれはじめ(4月中旬)および採捕ピーク（6月下～7月上旬）ともに例年と比較して遅かった。しかし、採捕数のピークは例年なみの水準であった（図1)。抱卵個体は5月初旬に出現し、その後6月にかけて急激に増加した。雄は4月に多く採捕されていたが、その後減少した（図2)。

捕獲されたスジエビのCLのヒストグラムを図3と4に示す。雌は雄よりも大型であった。雌雄ともに7月に入ると小型個体が多く採捕されるようになった。

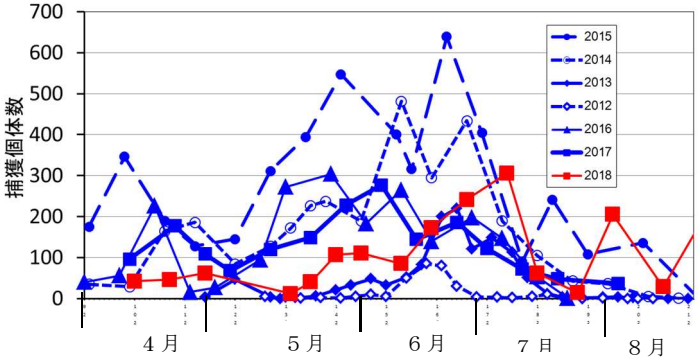

図1　スジエビ採捕個体数の変動

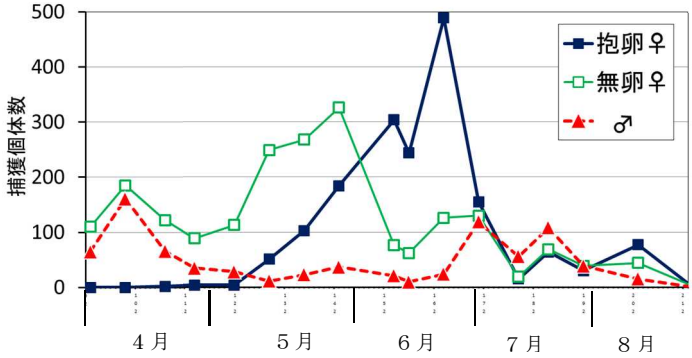

図2 スジエビの抱卵状況および雄の採捕個体数

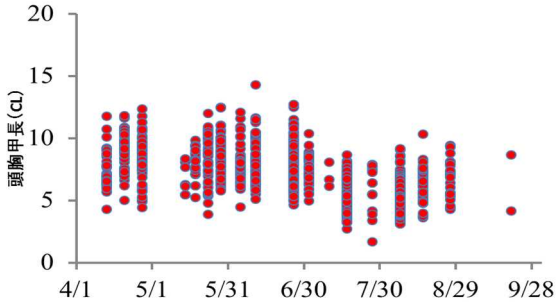

図3　スジエビ雌個体のCL頻度分布

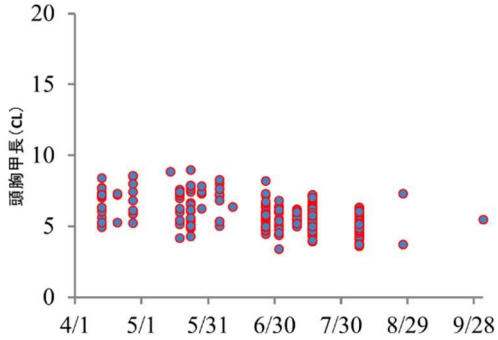

図4　スジエビ雄個体のCL頻度分布